

はじめに



第1章 植物学に出会う

第2章 初めての東京

第3章 背長屋とたぬきの巣



第4章 若き植物学者

第5章 ロシアへの思い



074



056



042



026



006



004

第6章 びんぼうとの戦い



第7章 植物学を、人びとに



088

第8章 潤衛(ナヌイ)のおりもの



104

第9章 学問のみのり



132

第10章 草木を愛する心



148

- 富太郎採集マップ 161
- 標本はなぜ大切? 162
- マキノ新聞 164
- 富太郎に会える場所 166
- 牧野富太郎の生涯 168

はじめに



蝶ネクタイに丸めがね、肩から大きなかばんをさげて、なんだかうれしそうなこの人「トトペーパー」こそ、これから始まる物語の主人公、牧野富太郎です。

「日本の植物学の父」といわれる牧野富太郎は、植物採集に行くときに、いつもこんなかっこうで出かけました。きちんとした服装は植物への尊敬の気持ちのあらわれで、満面の笑顔は、大好きな植物に会えるのがうれしくてたまらないからです。植物が好きすぎて、自分のことを「わたしは草木の精かもしれん」と言い出すほどでした。

そんな富太郎を、植物の神さまも愛したのでしょう。ふたつの大きな才能を与えてくれました。絵を描く才能と、ただひたすら植物を愛するという才能です。富太郎はこの才能を武器に、小学校二年で中退という学歴ながら、天下の東京大学に出入りし、めき

めきと力をつけ、研究を進めていきます。

日本全国の野山を歩いて集めた標本は、四十万点。調べて分類し、名前をつけた植物が一五〇〇種類。多くの本や研究雑誌にかかり、今でも図書館や書店に並ぶ『牧野日本植物図鑑』を作りました。

こんなにたくさんの仕事をするために、富太郎は研究のためのお金をじしとし使い、裕福だった実家の店をつぶしてしまいます。七人の子どもたちと妻は、借金取りに迫られるびんぼうぐらし。しかしどんなに苦労しても、家族をまきこんでも、富太郎は「ぜつたいにこの学問だけは、手につかんではなさなかつた」のです。

「朝な夕なに草木を友にすれば、さびしいひまもない」

こう語っていた富太郎の九十四年にわたる人生を、のぞいてみましょう。



番頭の竹藏の手の中で、その時計は動いていました。長い針と短い針のあいだに小さな丸いくぼみがあり、その中を小さな秒針がきまじめにぐるぐるとまわっています。成太郎はその動きがおもしろく、あなたのあくほど竹藏の懐中時計を見つめていました。成太郎とは、のちの牧野富太郎の幼いときの名前です。

「どうですらう、たいしたもんですらう」

そう言つてふところに時計をしまおうとしましたが、成太郎は目を時計からはなそうとしません。竹藏はため息をつき、じまんの懐中時計を成太郎にわたしました。

「少しだけやからね」

成太郎はうなずくと、両手で時計を受け取りました。しばらくして、竹藏は成太郎の

姿が見えないのに気がつき、いやな予感がしてきました。

「坊ちゃんを見んかつたかい?」「見んかつたねえ」

奥の間のふすまをあけると、成太郎がうず巻きになつたゼンマイを手にとつて、しげしげとながめています。机の上には歯車やネジやリングがちらばつていて、そばに文字盤と懐中時計のふたがありました。成太郎は時計の中身が見たくて分解してしまったのです。

竹藏ははつと息をのみ、へたへたとすわりこみそうになりました。竹藏が、一家を取り仕切る成太郎の祖母、浪子にうつたえたことは言うまでもありません。しかし浪子は成太郎をきつくしかりませんでした。

「こまつた子やねえ……」

浪子はつぶやきながら、それにしてもずいぶん器用に分解したものだと感心してました。何かに夢中になると、それに向かってまっしぐら。ほかのことには目もくれず、気にもかけない。好奇心が強く、何かを見たい知りたいと思つたら、わかるまでとことん、やりたがる。成太郎にはそんなところがあり、それは決して悪いことではない